

# 当院における糖尿病患者の 自己効力に関する調査

武田クリニック 古田 史



# 目的

安酸が開発した「自己効力感刺激要因尺度」を測定することにより、当院における糖尿病患者の傾向を把握し、今後の患者教育充実のための方向性、課題を明らかにする



# 研究方法

## 1) 研究対象

3ヶ月以上当院へ通院歴がある患者の中から、無作為に抽出した  
130名

## 2) 調査方法

「自己効力感刺激要因尺度」に基づくアンケート調査

## 3) 調査期間

平成15年4月14日～平成15年4月25日

## 4) 倫理的配慮

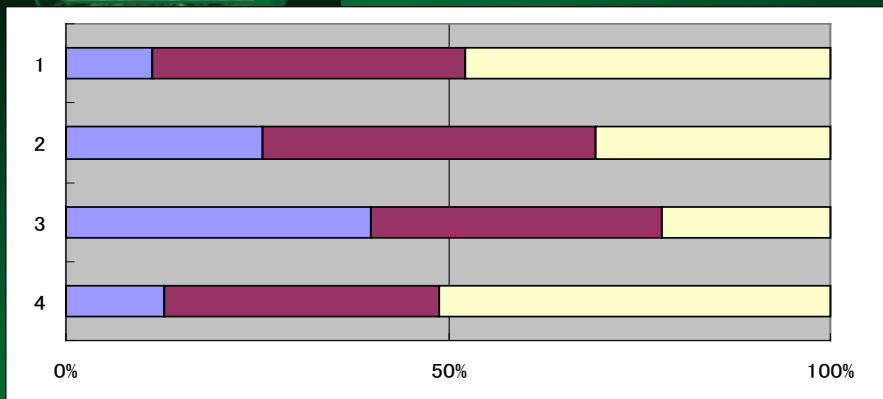
調査への参加や中断は自由意志であり、それによってなんら不利益を被ることはない、調査結果は統計的に処理するため個人の名前や回答が公にならないことを口頭および書面にて説明し、同意が得られた場合には署名をいただき施行した



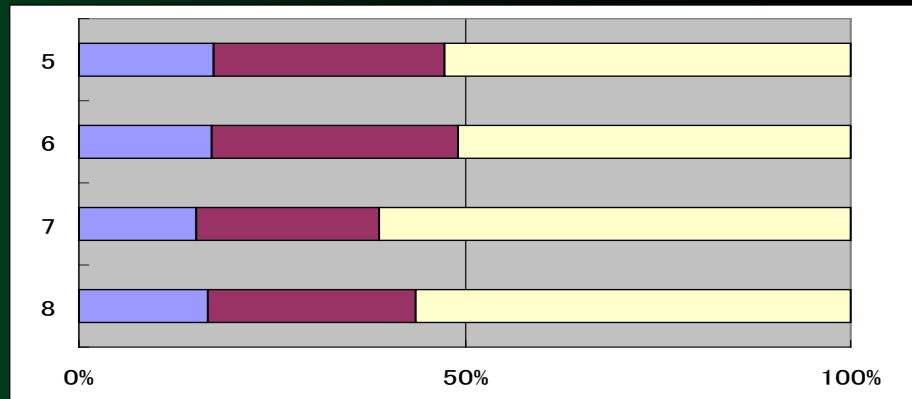
# 対象者の背景

- 男性: 83名    女性: 37名    総数: 120名
- 有効回答率: 92.3%
- 平均年齢:  $57.75 \pm 11.97$ 歳
- HbA1c:  $7.0 \pm 1.1\%$
- BMI:  $24.71 \pm 3.96\%$
- 病歴:  $8.8 \pm 6.3$ 年

# 遂行行動の達成



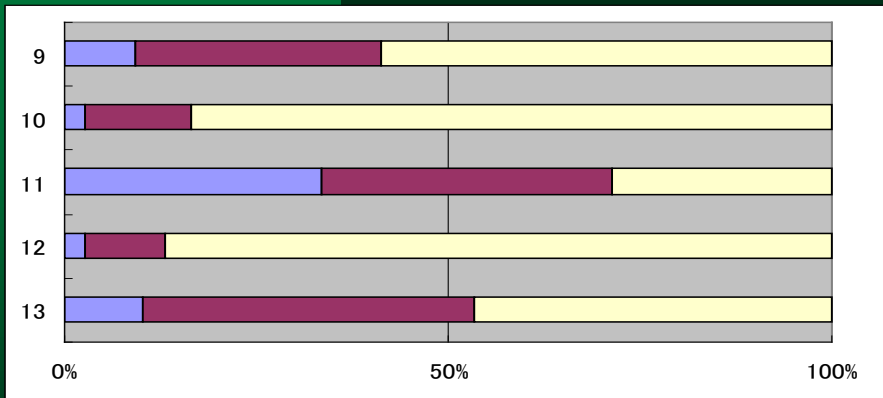
# 代理的経験



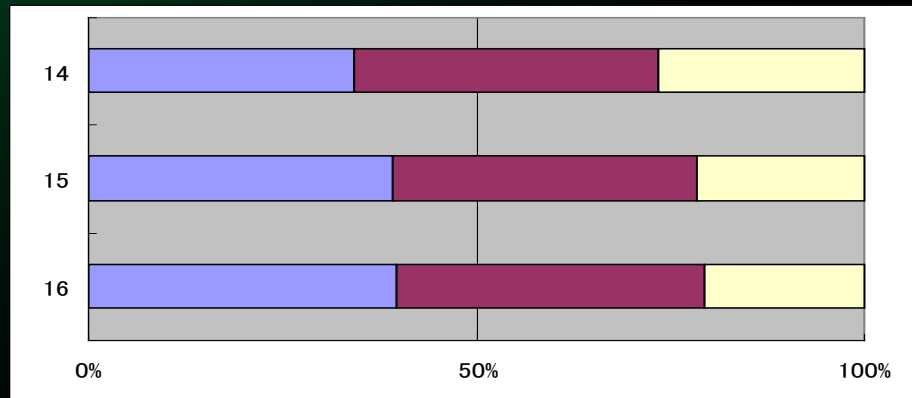
- 1日の食事内容を食品交換表の表1～表6、付録に分けて計算する
- 宴会の席や、正月のような特別の日でも自分の指示カロリーを考えて食事を取る
- 外食のメニューを指示カロリーの範囲内でバランスを考えて選ぶ
- 指示カロリーの食事を自分で計算して実際につくる

5. 食事療法を続ける工夫を同病者から聞く
6. 私と似た生活環境で食事療法が守れている人の話を聞く
7. 食事療法に成功している人のビデオやテレビを見る
8. 食事療法に成功している同病者の体験談を聞く

# 言語的説得



# 生理的情動的状态



9. 友人から食事療法を続けていて感心だとほめられる
10. 医師から食事療法についてほめられる
11. 家族から食事療法を守るようにと励まされる
12. 看護婦から食事療法についてほめられる
13. 栄養士から食事療法について指導を受ける

14. 食事療法を守っていると、自覚症状がよくなる
15. 食事療法を守っていると、健康的な気分になる
16. 食事療法をしていると、体の調子がいい

- よく体験する
- たまに体験する
- まったく体験しない

クリックするとページが進みます。



# 結 果

- 対象者の背景は男性83名、女性37名、総数120名（有効回答率92.3%）であり、年齢は $57.75 \pm 11.97$ 歳。治療法は食事療法のみが22名、経口血糖降下剤使用者が85名、インスリン使用者が25名であった。HbA1cは $7.0 \pm 1.1\%$ 、BMIは $24.71 \pm 3.96\%$ 、病歴は平均 $8.8 \pm 6.3$ 年。合併症は神経障害68名、網膜症27名、腎症29名であった。自己効力感刺激要因とその体験度の結果として、「遂行行動の達成」は〈1日の食事内容を食品交換表の表1～表6、付録に分けて計算する〉〈指示カロリーの食事を自分で計算して作る〉を体験したことがあると答えたものは5割前後、〈宴会の席や正月のような特別の日でも自分の指示カロリーを考えて食事を取る〉もしくは〈外食のメニューを指示カロリーの範囲内でバランスを考えて選ぶ〉を体験したことがあると答えたものは7割以上であった。「代理的経験」は4つの項目すべてにおいて半数以上が体験していないと回答している。HbA1c6.9%以下をコントロール良好群、7.0以上を不良群として統計分析を行ったところ、「遂行行動の達成」「代理的経験」において有意差がみられた( $p \leq 0.05$ )。「言語的説得」は家族からの励ましは7割以上が体験しているが、医療者からの「言語的説得」は8割以上が体験していないと回答している。「生理的情動的状态」は食事療法を守ることによって7割以上が身体的、精神的に軽快感を持ったことがあることがわかった。



# 考案

- ▼ この結果からいえることは、「代理的経験」と医療従事者からの「言語的説得」に関する情報が少ないということであり、これは先行研究に一致する。「代理的経験」によって自己効力を高めるアプローチとしてはピアラーニングが知られていることから、患者同士が各々のセルフケアの方法や糖尿病に対する思いを語りあえるような会の企画や、インターネットを用いた患者同士の情報交換できる場をつくるといった方向性で検討していきたい。また「言語的説得」に関して安酸は、医学データ依存から脱却し、行動をきちんと評価する視点を持たなければならないと述べている<sup>1)</sup>。これを可能にするのがエンパワーメントの理念に基づく実践であると考えます。またエンパワーメントの理念に基づく実践は「言語的説得」のみならず、「遂行行動の達成」の支援にもつながると考えられる。そのためスタッフ間で理解を深め、患者教育充実を図る上での基礎としたい。
- ▼ 【引用文献】
- ▼ 1) 安酸史子編著. 成人看護学—慢性期. 建帛社, 1999, p45